



## 「疎まれ奉る」

昨日、久しぶりにまじめな？(学問的な?)  
学級通信を書いたので、今日もそれになら  
てみよう…って、読む君たちはつまらないか  
もしれないが、入試で出会うこともあるかも  
知れないし、ちょっと難しい内容になるが、  
敬語の復習にもなる内容なので、心して読ん  
でほしい。

＊

さて、問題でいってみよう。次の文は、光  
源氏が明石の地で明石入道の娘(後の明石の  
君)とただならぬ仲となった際、京に残して  
きた紫の上に当てた手紙の一節である。傍線  
部の敬語は、誰の誰に対する敬意か。

我ながら心よりほかなるなほざりごと  
にて、疎まれ奉りしふしぶしを、思ひ出づ  
るさへ胸痛きに、またあやしう、ものはかな  
き夢をこそ見侍りしか。(「源氏物語」明石)

(注)○我ながら～なほざりごと＝須磨・  
明石への流転の原因となった、右大臣家の  
娘朧月夜と関係を持ったこと。

○あやしう～見侍りし＝明石の地で、明石  
入道の娘と関係を結んだこと。

＊

この引用部分、いかにも源氏らしい一節で  
おもしろい。朧月夜と浮気して「疎まれ奉り  
し」ことを反省しているが、にもかかわらず、  
またまたどうしたわけか明石の地で夢を見  
ちゃったよ…みたいな手紙である。いやはや。

さて、問題だが、ここは「疎まれ」の「れ」  
が受身で、それに謙譲語の「奉り」がつく形  
になっているため、謙譲が「動作を受ける相  
手」に敬意を表すこととあいまって、「受身  
+受ける相手」という、一見するとややこし  
い構造に見えるところがミソである。

これは、実は一年生の時の「木曾の最期」  
にも出てきた形である。木曾殿に、最後の戦  
いに女を連れていたなどと取り沙汰されるの  
は不都合だから、お前は立ち去れと言われた  
際の巴の言葉が

あまりに言はれたてまつて、「あつぱれ、  
よからう敵がな、最後にいくさして見せた  
てまつらむ。」

であるが、その中に「言はれたてまつて(言  
はれたてまつりて)」が出てきていた。

さて、例題に戻るが、これは「→」で考  
える。まず「疎む」だが、この動作の方向は、

●紫の上(A) → 光源氏(B)

である。が、ここは「疎まれ」と受身だから  
→は逆になって、

▲光源氏(A) → 紫の上(B)

となる。ここに敬語の知識を付け加える。尊  
敬語は、

○A → B

なら、→の出発点である「動作する人」つま  
りAを尊敬することになる。一方、謙譲語は  
その逆で、「動作の受け手」つまりBを尊敬  
することになる。これを上図▲に当てはめれ  
ばよい。「奉り」は謙譲語で→の先Bを尊敬  
することになるわけだから、紫の上に対する  
敬意を表すことになると結論づけられる。よ  
って、答えは、「(手紙の書き手である)光源  
氏の紫の上に対する敬意」となるのである。

ちなみに、「木曾の最期」の「たてまつて」  
は、「言ふ」が「木曾殿→巴」だから、「言は  
れ」は「巴→木曾殿」となり、→の先の木曾  
殿に対する敬意を表すことになる。

\*山口明穂『日本語の論理』(大修館、2004)を参照。